

## 建築業界に齋す

### 天災貢獻説

清水組社長 清水 釘 吉  
工 學 士

私は憶ふ、天災さいふものは人間社會に甚大な貢獻をしてゐるものである。殊に建築界にまつては大なる試練であり、大なる啓示であり、大なる譴責である。吾々建築界に在る者は彼の大地震によつて、天よりきれだけのいゝ教訓を受けたか分らない、建築界のみならず、延いては國民として、國家として、人類として、その人心及び風教上にきれだけ大なるショックを受けたか分らなかつた。

× × ×

五年前に關東を襲つた大地震は、一瞬の間に幾多の建築物を破壊し崩壊し去つた、人の財産の多くは空しく灰燼に歸した、何萬さいふ人の命は恰度紙屑のやうに現實世界から去つた、ここは今更喋々を要しない、かうした打撃を受けては誰だつて安閑さをしてゐられない、無反省ではゐられない『あれをあゝすればよかつた』とか『これをコウすればよかつた』と、昔を今になすよしもない繰言を啣つたものだ、それがさりかへしもつかないここぞ知れば知るほど、諦めるべくして諦め得ざる悲哀を痛感したのである。そして、これに鑑みて『これからは』と更新の策を考へる、それこそ畢生の努力である。そして特に建築に携つてゐるものは考へる、『實にこれではいけないかつた、何故もつと眞面目にやらなかつたか』と崩壊した建物を前にして輾々反則の心情をくりかへした。そして『これからは、一』と裏心から心氣一轉する、ショックさいふのはこれである、人間の頭では止めるすべを知らない人心の弛緩を、知らしめてくれるものは決して人の智識では不可能であつた、こどまる所を知らなかつた人間の世紀末的現象は、人間自身ではさうすることも出来なかつた。そこへ突然として來たのは天の一閃で

あつた。

× × ×

明治の初年、日本の建築界に新潮流が入つて來た當時、つまり洋風建築が出現した當時は、一般建築業者は『石橋を敲いて渡る』ていゝの堅實さをもつて従事した、だが月變り星移る間にはだんだんさうした感じが鈍くなつて行つた、つまり堅實性を消却せられて行つたのである。初めのうちこそは、煉瓦を一つ置くのにも心をこめてやつた、設計をするのにも微に直り細を穿つて念入りにやつた。然しそれが終ひには事務的になる、事務的になれば早く仕上げればよい、能率を挙げればよいさいふ風になる。あらゆる設計者も、あらゆる事務家も、あらゆる労働者も、あらゆる注文者も早く仕上げて經濟的にうまくやつてゆけばよい、さいふ風になつた。それは人々の止むを得ない心情であつた。それでも偶には『これではいけないな、大地震でもあつた場合は一たまりもなく潰れるだらう、あぶない』と感じてゐた人もないではなかつたであらう然し愉安——一時の安きを求むる——早く仕上げて經濟的にやらうさいふかうした考への方が遙かに大きかつた、由來日本人の弊は愉安的——一時の安きを求むる——にある、それであるから日本の政治界は？日本の經濟界は？將又對外貿易は？果して如何の感があるだらうか。私は單に議論を弄ぶものではない、が日本の靡亂したる政治の現状を見經濟的困難ともいはれる這般の財界恐慌狀態に直面し、入超に亞ぐ入超をもつてしつとある貿易の萎微不振を目撃するに及んでは、勢ひ言及せざるを得ないものである。

殊に私は、直接携つてゐる所の建築界に於てこそ犇々この感を深うする。初期に於け

る建築界の意氣今何處にありや、さいふこころを感じてゐた時に當つて、私は、これは何か覺醒せしむべき刺戟が來なければならぬと思つてゐた、その矢先、彼の大震災が忽然として來た。罹災者にまつて一大悲惨事ながら人間社會にまつて大警告を與へられたのである建築界にまつては千古絶對の教訓であつた『こんなやり方ではいけないぞ』さいふ叱咤の激勵であつた。天來の——。

× × ×

當時説をなす人々のうちにはやはり私も同様な考への人もあつたやうであつた、即ち『これを天譴ご思へ』さいふやうに。然し人々のうちでは『ナニ地震は宇宙の自然現象だ、人間は人間だ地球の地殻の變動に過ぎないものを擬人法を使つて天譴ごみるのは不贅成だ』さいふ人もあつた。けれどもそれはたゞ人間の考へ方一つにある、これを天譴ご思つて將來に向つて改革を期するさいふこころは決して悪いこころではないし閑事業ではない、改革を期するこころに進歩がある、よりよき生活への段階である。

で、大震災後は卒然として心機一轉した、警視廳では建築條令の限度を高めた。従來建築業者は自身の經濟的利益のためのみに安全律を無視してゐたのではなかつた、それは建築法の許す範圍内に於て簡單に仕上げてゐたつまり建築法で許してゐるから、かうしても差支へない、さいふのであつた。警視廳方面でも『これ位でいいだらう』位で許して『ゐたのである。それが大震災によつて『これ位でいいだらう』位ではいけないご知つたのである。

× × ×

建築界に於ても『これではいけない』ご痛感した、注文者の方でもたゞ一時を糊塗するに等しい従來のものではいけないご悟つた、堅實確固なるものを造らねばならぬご覺つたのである。かうして大震災の復興はなされつある、吾々建築業者は、具さに仕事を念を

入れ、今後、這般の大震災よりも二倍三倍もの大震災が來るかも知れない、そんな時でも崩壊しない程度のものを造るやうになつた、地震の程度は人智では到底計り知られない、故に極度に堅牢なのが必要である、地球が炸裂すれば仕方がないが、一面が陥没したり、顛覆したりしたごても、倒れるかは知らないが微塵に崩壊などはしないやうに工事をしてゐるのである。

× × ×

私は復興の途上にある現状をみてかく想ふ成程大震災の慘害はさるこころながら、彼の大震災が比較的早かつたごころは欣幸ごしなればならぬ。若しあれが、五年十年後、或は五十年百年後に突發したごしたならばごうであらう。その頃は従來の浮薄なる砂上の文明がもつごもつご般盛ごなつた揚句、彼の大震災よりも數十倍の慘害を蒙るであらう。ありごあらゆる建築物は崩壊する、それに準じて人の財は灰燼に歸する、人命は何十萬ごいふ犠牲をはらう、やうなごころになるごころは單なる想像のみではないご想ふのである。

まだまだ砂上樓閣の文明程度が低調だつたからよかつた、その被害を少きに止めるごころが出來た。思へば天譴の早かつたごころをせめても感謝をしたい。

#### 橋の大阪……………千五百橋

天明間に大阪の橋は 155 橋もあつて、さすがに水の都、日本一の橋の都であつたが、現在に於ては堂々たる不燃質の永久橋に片つばしかから改築され、昔のおもかげもないとは云へ其數に於てはやつぱり日本一である。

× × × ×

大正十五年六月大阪市土木部の調査によると大阪市内で土木部所管の橋が 1472 橋その長さは總計 40 里と云ふ數。

この外に電氣局所管の橋が 122 と港灣部所管の橋が 11 ある。

都市計畫部が以上の外にまだ近代的な長大な橋梁を幾つも架設しつゝあるから、數年後の大阪の橋は又一層の壯觀であらう。